

大エルミタージュ美術館展 オールドマスター西洋絵画の巨匠たち

森アートセンターギャラリー（六本木） 2017.03.18～06.18



1764年に開館したロシア・サンクトペテルブルグの「エルミタージュ美術館」は、ルネサンス期や印象派の絵画、彫刻、騎馬民族遺物である装飾品などの美術品「310万点」余の膨大な美術品を収蔵し、ロマノフ王朝の栄華を伝えている。「オールドマスター」とは、ルネサンス時代の「ティツィアーノ」「クラナハ」などから、バロックの「レンブラント」「ルーヴェンス」「ヴァン・ダイク」などを経て、18世紀の「ヴァトーブシェ」などに至る巨匠たちを指している。今回の展覧会では、美術館が所蔵する絵画の中でも質・量ともに群を抜く、17～18世紀に焦点が当てられて「傑作85

点」が公開されている。

ティツィアーノ《若い女性の肖像》 1536年頃 （上図は一部で真中は全図）



モデルが下着の上に毛皮の裏地つきのガウンをはおったこの若い女性の肖像は、《毛皮をまとった女性》の異作で、モデルは同じ女性であると思われる。後世の加筆によって全体の印象はやや硬くなっているが、X線検査によると最初は帽子をかぶっておらず、真珠の髪飾りをつけていなかったことが判明している。

豪華な帽子や衣装、装身具からパトロンの子か愛人の半ば理想化された肖像であると考えられる。

ブラゴナール《盗まれた接吻》 1780年代後半 油彩・カンヴァス



アントワネットの時代に生まれた男女のロマンチックな絵画作品で、男心をくすぐる魅力的な女性をバロックの劇的演出で描かれ、少女が小部屋にあるストールを取りに来たところ、急に少年に手をつかまれて頬にキスをされてしまう様子はまるで映画の一場面のようなものである。彼女の視線は半分開いた扉を向き、隣にいる婦人たちに気にしている様子が伺えるが、それとも少年が入ってくるのに気付く暇もないほど、全く一瞬の出来事であったのだろうか？